

2021年2月13日(土)～2月19日(金)

渋谷 ユーロスペース

東京都渋谷区円山町1-5
KINOHAUS 3F

コロナ以前にも、「差別と分断」が世界を切り裂いていた。
「外国人」「よそ者」「弱者」を強く排斥することで、
国内の選挙民の支持を得る政治家が、あちこちで生まれていた。
日本も例外ではない。

コロナはこの傾向に拍車をかけつつある。姿を見せない「敵」=ウイルスに
怯える人びとの心は、いままで以上に、この種の排外的煽動に乗りやすい。

死刑も、国家が放つ(強い)言葉の典型だろう。

今年は、奇しくも、7本の作品が、ここ数年に制作されたものだ。

死刑制度は、いま、ここで、私たちが直面している、逃れることのできない社会問題なのだ。



『処刑の丘』

(ラリー・サ・シェビチコ 1976)



『8番目の男』

(ホン・スンワン 2019) × 李泳采



『菊とギロチン』

(瀬々敬久 2018) × 太田昌国



『ウォーデン消えた死刑囚』

(ニア・ジャヴィディ 2019) × 村山木乃実

映画(監督 制作年) × 語る人(一回限り、裏面参照)

第10回死刑映画週間 「差別と分断」のなかの死刑制度



『粛清裁判』

(セルゲイ・ロズニツァ 2018) × 池田嘉郎



『コリーニ事件』

(マルコ・クロイツバイントナー 2019) × 木村草太



『プリズン・サークル』

(坂上香 2019) × 坂上香



『アメリカン・プリズナー』

(ティモシー・ウッドワード・Jr. 2017) × 柳下毅一郎